

「メタ・ソーシャルスキル」測定尺度作成の試み

石 井 佑 可 子

1. 問題

良好な対人関係を築く一要因として、社会的スキルを有しているか否かということが挙げられる。社会的スキルの定義は統一されておらず研究者によってまちまちだが、（特に対人関係における）適切な社会的行動は個人の持つ技能（スキル）に左右される、という考えに基づいており、多くの研究で社会的スキルを高度に有していることと良好な精神的健康との関係が示されている。反対に社会的スキルの欠如やその使用頻度が低いことは様々な社会的不適応につながるとされており、社会的スキルは我々の良好な社会生活にとって欠くことのできないものだといえる。また、社会的スキルは学習によって獲得可能と考えられるため、スキルの取得訓練（ソーシャルスキルトレーニング、以下SST）が盛んに行われている。その対象も多岐に亘っており、治療・更生を目的としたものから、小学校において学級単位で行うもの（藤枝・相川,2001； Zsolnai&Jozsa, 2003）や、大学生を対象に実験的に行うもの（相川,1999）・大学教育の一環として自ら希望する学生を対象に実習形式で行われるトレーニングも増えてきた（大坊・栗林・中野,2000；後藤・宮城・大坊,2004など）。さらに、近年注目を集めている学習障害やアスペルガー症候群の人々における社会的スキルの欠如も指摘されており（Whitehouse, Chamberlain& O'brien,2001 など）、社会的スキルに対する世間の関心の高さ・一般生活における効果への期待が窺える。

社会的スキルを扱う研究領域は多岐に亘っているが、社会的スキル研究は概ね以下の3つのような特徴を持つといえる。①社会的スキルとして取り上げられるのは、表出がポジティブな「望ましい」スキルである（例えば、相手と仲良くする・会話を持続させるなど）。②社会的スキルの行使頻度が高いほど社会的スキルが高く、社会的適応と関係すると考えている。③社会的スキル行使時における状況・行使する相手との関係性についてはあまり問わない。

この特徴は社会的スキルの測定法に良く現われている。スキル測定には、方法の簡便さから通常自己報告型が頻繁に使用されているが、わが国で現在広く使用されている自己報告型の尺度として、菊地（1988）のkiss-18が挙げられる。これには、「他人と話していて、会話をとぎれさせない」「自分の感情や気持ちを素直に表現する」など18種類の項目があり、「いつもそうだ～いつもそうでない」の頻度を回答する形式となっている。また、和田（1991）のソーシャルスキル尺度は対人課題領域における言語的な対人有能性を「親密関係維持」「関係開始」「自己主張」による3因子25項目で測る形式となっている。その他の尺度として堀毛（1991）は社会的スキルをディコーディング（解読）・エンコーディング（記号化）スキルに大別して尺度項目に取り上げた（ENDE1）。現在は、「会話をうまくすすめる」などの「記号化」、「言葉がなくても相手のいいたいことが何となく分かる」などの「解読」、「相手の言うことが気に入らなくてもそれを態度に出

さない」などの「統制」の3つの基本スキル15項目からなるENDE2に改良されている（堀毛, 1994）。

従来の研究では測定尺度の得点が高ければ高いほど、つまり「望ましい」とされているコミュニケーションスタイルを（その場の状況や相手と自分がどのような関係なのかには関わらず）とにかく「高頻度に行う」と回答すればするほど社会的適応と関係し、一方で社会的スキルを使う頻度が少ない・非主張的なことは不適応だということになる（Trower, Bryant & Argyle, 1978 など）。

しかしこのように想定された社会的スキルを実際の生活に即して考えてみれば、「望ましいとされているスキル」を通状況的にただ高頻度を使用するということがどのくらい重要であるのかは疑問である。日常生活での高次な社会性が要求される対人場面を想定すると、多様なスキルをポテンシャルとして有しており、状況の特質によって保持するスキルの中から特定のスキルを適宜行使したり、時には行使できることを知りながらも敢えて用いなかったりできることの方がより重要な要素かつ自然な振る舞いとも考えられる。さらに、時にはこれまで望ましくなく「ネガティブ」とされてきたコミュニケーションスタイルを「敢えて」選択できるということが本人の精神的な健康及び相手との関係にとってもよりよい結果を生む場合が予測できるのではないか。

実際、社会的スキル研究やSSTの弱点として一般化や維持が難しいということが挙げられている。複数の研究者がSSTによる短期間の行動変容には効果を認めているものの、効果の維持や日常生活への般化に関しては疑問が残るとしている（Trower, 1995；相川, 1999 など）。こういったことも併せて考えると、社会的スキルの概念・測定方法自体を再度見直し、新たな一面を加える必要がある。さらに、単なるスキルの行使のみを以て適応的と結論付けるのではなく、状況のメタ認知を含む処理過程まで考慮する必要があるのではないか。

そこで筆者は従来の社会的スキルの役割を補助・強化する概念として、ネガティブなものも含めた自らの社会的スキルや対人関係状況に対するメタ認知を働かせ、スキルの適切な選択的行使・非行使を決定するスキルとして「メタ・ソーシャルスキル」を提案している（石井, 2006；Figure1参照）。本研究では、その測定尺度作成を試みる。

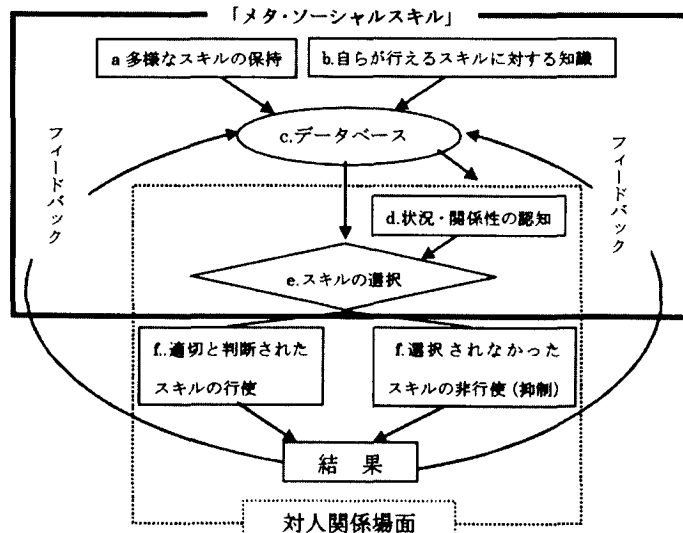


Figure1 「メタ・ソーシャルスキル」モデル図

2. 「メタ・ソーシャルスキル」測定尺度作成

前項で挙げたモデル図にある通り、「メタ・ソーシャルスキル」は実際の対人関係場面での行動とは独立したスキルであり、行動の実行に密接に関わって機能するものと考えられる。そこで「メタ・ソーシャルスキル」の測定には、実際の対人関係行動についての尺度と、自らのスキルに対するメタ認知・状況の認知についての尺度（以下メタ認知尺度）の2つを作成することとする。以下に「メタ・ソーシャルスキル」の概念を整頓し、それぞれの尺度について述べていく。

2-1. メタ認知尺度

まず「メタ・ソーシャルスキル」の各段階について、Dodge (1986) の社会的情報処理モデルにならない、定めることとした。社会的情報処理モデルは本来子どもの攻撃行動や不適応行動の生起を説明するために提案されたものである。しかし、児童期以外の青年期に対してもこのモデルを使った研究がなされていること（久木山,2002; Shahinfar,Kupersmidt&Matza,2001など）、攻撃行動や不適応行動は対人関係の中で起こる行動であるということ、社会的情報処理モデルにおいても状況に応じた行動に注目しているということ、社会的スキル研究のモデルにも彼のモデルを参考にしたもの（相川（2000）¹；相川・佐藤・佐藤・高山（1993））があることなどから、「メタ・ソーシャルスキル」にも十分応用可能であると考えられる。

Dodgeは認知から行動が生起するまでの流れを一連の情報処理過程として捉え、複数のステップを設定した社会的情報処理モデル（Dodge,1986;Crick & Dodge,1994（改定版））を提案している。改定版社会的情報処理モデルでは6つのステップが設定されており、「1.社会的手がかりの符号化（内的・外的）」「2.手がかりの解釈」「3.目標の明確化」「4.反応のアクセスと構築」「5.反応の決定」「6.行動実行」からなる。またこのモデルにはそれらに加えて過去の実験や記憶からなる「データベース」が設定されており、それが各ステップと相互に影響しあっているとされている。

そこで対象とする社会的行動を社会的スキルに特化してモデルにあてはめ、「メタ・ソーシャルスキル」について整頓した。各段階やその具体的な内容については以下のようにまとめた。

①符号化・解釈：「状況・関係性の読み取り」

対人関係場面におかれたときに、その場の状況・相手との関係性（関係の持続性・力関係・立場）を把握すること。

②目標の明確化：「対人関係場面における望む結果の認知」

コミュニケーションによって自分自身がどのような結果や相手との関係性を得たいのかの明確な認知。

③反応のアクセスと構築：「その状況下で可能なスキルの探索」

置かれた場面で行使できそうな社会的スキル候補の列挙。

④反応の決定：「適切なスキルの選択」

望む結果と状況に応じた社会的スキルの選択。

⑤行動実行：「スキルの行使・非行使」

選択したスキルの行使、選択しなかったスキルの抑制。

⑥仲間からの評価・反応：「効果の学習」

相手の反応・状況の結果から行ったスキルの効果を学習。

データベース（記憶・獲得されたスキル・社会的スキーマ・社会的知識）

「スキルレパートリーの把握（多様性・正確性）」

- a. 多様性；行使することの出来るスキルを多様に保持していること。
- b. 正確性；自分が行うことの出来る社会的スキルを正確に把握していること。
- c. バランス；スキルとして行われるコミュニケーションスタイルに、ポジティブコミュニケーション・ネガティブコミュニケーションがバランスよく含まれていること。

「各スキルの効果の知識」

ネガティブ・ポジティブに関わらず、自分が行うスキルがどういう結果（効果）を及ぼすのかについて自覚していること。

以上の各段階のうち、メタ認知尺度は実際のスキル行使に関わる過程を除いた段階を測定することとし、対応した質問項目を作成した。

2-2. 社会的スキル行使測定尺度

社会的スキル行使尺度は実際のスキル行使の度合いを測定するものだが、スキル行使の測定を試みるにあたって、社会的スキル概念自体を捉えなおす必要がある。前述した通り、従来の社会的スキル研究では「望ましい」行動のみをスキルとして扱っている点・状況要因に対する考慮を欠いている点で現実場面に齟齬をきたしていると考えられる。そこで社会的スキル行使尺度ではネガティブな表出のコミュニケーションスタイルを社会的スキルのレパートリーに含め、尺度項目に含めることができるかを検討する。また状況要因については、一つのスキルにそれを行行使する相手との関係性を複数設定し、それぞれに回答を求める形式をとることで「スキルの使い分け」までも測定することを試みる。

3. 尺度の作成

3-1. メタ認知尺度

方法

調査参加者；18-35歳の大学・専門学校生567人（男201・女366人、平均年齢20.37歳）

調査項目；「メタ・ソーシャルスキル」の選択的行使・非行使を除く各段階・データベースに関する12項目。それぞれの項目について「普段の生活で他の人たちと関わるときに自分がどの程度あてはまるか」について「1.全くあてはまらない」～「4.とてもあてはまる」までの4段階で評定させた。

結果

因子分析

重み付けの無い最小二乗法、プロマックス回転による因子分析を行い、 α 係数・スクリープロットテストの結果1因子解を採用した。 α 係数から2項目を除外した10項目をメタ認知尺度項目とした（Table1）。最終的な信頼性係数 α は.72であった。

Table1 メタ認知尺度項目

1. 意思疎通が思い通りにいかなかったときに、コミュニケーションの仕方を変えてみる 2. 自分がとる行動によって、人とのやり取りの結果や相手への影響がどのようになるのかについてだいたい自覚している 3. 状況や自分が望む結果などを考えて、その場で一番良いと思える態度・行動をできるだけとろうとする 4. その場の状況がどういうものかについてすぐ理解できる 5. 自分がとる可能性のある態度や行動はだいたい自覚している 6. その場で、どういうやり取りをしたいのか冷静に考える 7. 相手との立場の違いやこれからの関係について意識する 8. 実際にするかしないかは別にして、その場で自分がとることのできそうな行動についていくつか思い浮かべることが多い 9. 時と場合によって、やろうと思ったらできるコミュニケーションのとり方でもあえてしないことがある 10. コミュニケーションをとるときに、過去の経験を思い起こして参考にすることがある
--

3-2. 社会的スキル行使尺度

[予備調査①ネガティブコミュニケーションエピソードの収集]

ネガティブコミュニケーションの日常事態における使用実態とその有用性を探った。ネガティブコミュニケーションである回避・欺瞞行動経験について18-34歳の男女104名を対象に自由記述での質問紙調査を、また攻撃行動経験について20-35歳の男女13名を対象に面接調査を行った。得られたデータをカテゴリー化し、ネガティブコミュニケーション一覧を作成した。

[予備調査②ネガティブ・ポジティブコミュニケーションからなる社会的スキルの同定]

目的

どのようなコミュニケーションスタイルが適切で、かつ普段も使用するのか(=社会的スキルなのか)について大学生らによる評定を求めた。

方法

調査対象者；大学生・専門学校生ら306人(男性203人、女性103人平均年齢20.6歳)

調査項目；

コミュニケーションスタイル(ネガティブ・ポジティブコミュニケーション)

・ネガティブコミュニケーション；予備調査①のインタビュー・自由記述調査のエピソードで得られたネガティブコミュニケーションの一覧を使用した。項目に挙げられている文章には予め状況や相手が設定されている。

・ポジティブコミュニケーション；Kiss-18に挙げられている行動のうち、対人関係行動に関係すると思われるものを選んだ。Kiss-18の各項目には関係性が設定されていないため、一つの行

動についてそれぞれ相手との関係性（親密性低・中・高の3通り）を指定した。調査対象者が学生のため、親密性低の相手は「あまり親しくない人」・親密性中の相手は「サークルやバイトなどで関わる人」・親密性高の相手は「親しい友達」と教示した。

但し、Kiss-18の項目とネガティブコミュニケーションの項目が明らかに反転項目になっている場合は一方のみを採用した。項目数は計55項目。

評価形式；

挙げられた55項目の行動について、「①一般的にその行動を取ることの適切さ；どのくらい適切な行動だと思いますか（とても・やや・あまり・まったく の4件法）」「②自分自身がその行動をとる頻度；ご自分は普段どのくらいその行動を行いますか（いつも・大抵・あまり・まったく の4件法）」の2通りをそれぞれ問うた。

結果と考察

頻度・適切さ得点でそれぞれ因子分析（最尤法、プロマックス回転）を行い、スクリープロットテスト・解釈可能性からそれぞれ2因子解を採用した。因子構造はどちらの得点による分析でも類似しており、「意見が食い違ったときに相手の意見に合わせる」「気乗りしないのに遊びなどに誘われたとき、適当な言い訳をつけて断る」など、自らの真意や主張を積極的に示そうとしない形式の「非表出スキル」因子、「相手が間違っ^てたことをしているときに指摘する」「相手が勝手な行動をとって自分に迷惑がかかったときに怒る」など、積極的に自分の気持ちを主張する形式の「表出スキル」因子に分かれた。表出スキルは従来社会的スキルとして挙げられてきたコミュニケーションスタイルを示していると考えられる。

さらに、それぞれの因子において適切さ・頻度で共通して因子負荷量が.30以上のものを取り上げ、その際因子負荷量が.30に満たないものと2因子以上に亘って.30以上の負荷量を持つものを除いた。まとめられたコミュニケーションスタイルを「一般的に適切と評定され、かつ日常生活でも使われる社会的スキル」とした。

[本調査]

調査参加者；18-35歳の大学・専門学校生567人（男201・女366人、平均年齢20.37歳）

※有効回答は549名

質問紙の構成；

調査項目；

① 社会的スキル行使尺度

予備調査の各項目について、それぞれ相手が親密性高・中・低だった場合の使用頻度を「1.全くない」～「4.いつも」の4段階評定で問う形式（Figure2の例参照）。

それぞれの関係性の相手については、『「親しい人」とは友人や家族など、自分にとって近い関係にある人を思い浮かべて下さい。「中くらいに親しい人」とはバイトやサークル・仕事等の活動の中で関わらなければならない「仲間（先輩・後輩も含みます、友人は除いて下さい）」を思い浮かべて下さい。「親しくない人」とは普段余り関わりの無い人・関わりを持ちたくない人を思い浮かべて下さい（相手によって選択する答えが同じでなくても構いません）。』と教示した。

②従来の社会的スキル尺度

基準連関妥当性を検討するため、既存の社会的スキル尺度2種類に回答を求めた。しかし、実施した質問紙の項目数が多く（今回全てを分析の対象にはしていない）、調査参加者の負担になることから社会的スキル尺度を1種類ずつ含めた2通り（A・B）の質問紙を作成した。それぞれをランダムに配布し、調査参加者はいずれか一方にのみ回答をした（Aタイプ回答者；男性101人、女性183人・Bタイプ回答者；男性100人、女性183人）。

Aグループ「ソーシャルスキル尺度」（和田,1991）を使用した。元の尺度から2因子に亘って因子負荷量が.35以上の1項目を除いた24項目を使用した。回答は4段階評定で問うた。

Bグループ「ENDE2」（堀毛,1994）を使用した。各15項目について4段階評定で回答を求めた。

1 意見が食い違ったときに相手の意見に合わせる	普段どの程度行いますか。
親しい人が相手の場合・・・・・・・・・・	全く—あまり—たいてい—いつも
中くらいに親しい人が相手の場合・・・・・・・・	全く—あまり—たいてい—いつも
親しくない人が相手の場合・・・・・・・・・・	全く—あまり—たいてい—いつも

Figure2 社会的スキル行使尺度質問例

結果

因子分析

関係性に応じた3得点の合計値で最尤法、プロマックス回転による因子分析を行った。スクリープロットテスト、 α 係数、解釈可能性から2因子解を採用したところ、予備調査と同様「表出スキル因子（ $\alpha=.76$ ）」「非表出スキル因子（ $\alpha=.75$ ）」が得られた（Table2）。

基準連関妥当性

得られた2つの因子と従来の社会的スキル尺度との相関を求めたところ、ENDE2と表出スキルとの間に弱い正の相関（ $p<.01$ ）、ソーシャルスキルと表出スキルとの間に中程度の相関（ $p<.01$ ）が得られた。非表出スキルと従来の社会的スキルとの間にはいずれも有意な相関が見られなかった（Table3）。

関係性別の回答形式の検討

関係性に応じて回答を求める形式について、行使の度合いが変化するかを検討するため、スキルの種類×関係性で2×3の分散分析を行った。

その結果スキル・関係性の主効果が共に有意に見られ、関係性については親密性低<親密性中<親密性高の順でスキル行使頻度が高くなることが示された（ $F(2,1096)=312.59, p<.01$ ）。

交互作用も見られ（ $F(2,1096)=900.05, p<.01$ ）、単純主効果の検定をしBonfferoniの多重比較を行ったところ、表出スキルにおける関係性の主効果（親密性高>親密性中>親密性低の順にスキル行使が高くなる）（ $F(2,1112)=1354.19, p<.05$ ）・非表出スキルにおける関係性の主効果（親密性低>親密性高、親密性中>親密性高（ $F(2,1106)=155.19, p<.05$ ））が共に有意であった。

Table2 社会的スキル行使尺度因子分析結果（最尤法・プロマックス回転）・因子間相関

項目		1	2
順			
【因子1 表出スキル】 $\alpha=.76$			
11	相手が間違っことをしているときに指摘する	.67	.22
13	自分の感情や気持ちを素直に表現する	.67	.11
8	相手に自分がやってもらいたいことを率直に伝える	.65	.19
14	相手に会ってすぐに会話を始める	.53	.25
18	相手が先に誰かと話をしているところへ気軽に参加する	.53	.13
7	相手が勝手な行動をとって自分に迷惑がかかったときに怒る	.51	.10
【因子2 非表出スキル】 $\alpha=.75$			
16	相手の気に入らないことを言って、怒らせそうになったときに すかさず相手の機嫌を取ってその話を流す	.28	.67
9	争い・ケンカになったときに理解したふりをしてとりあえず謝る	.16	.59
1	意見が食い違ったときに相手の意見に合わせる	.10	.57
12	相手と意見が食い違ったときにその話題には触れないようにする	.07	.52
5	一緒にいるときに特に問題がなさそうであれば自分の意見を言わないで相手に合わせる	.11	.48
17	何か失敗したときに反省してすぐ素直に謝る	.28	.44
10	気乗りしないのに遊びなどに誘われたとき、適当な言い訳をつけて断る	.16	.42
6	相手が自分の専門（仕事や研究・活動）の話を理解していなさそうなときに「そうそう」などと言って適当に話を終わらせる	.14	.41
除外			
2	気まずいことがあったあとに和解するために話しかける	.46	.39
3	相手がある場にいる第3者の悪口を言っているときに一緒になって悪口を言う	.26	.30
4	自分のことを誤解されているなどと思ったときに相手の間違いを指摘する	.50	.35
15	とりとめのない話をしている時に会話をとぎれさせないようにする	.34	.41
因子間相関		—	.24
		.24	—

Table3 基準関連妥当性：ソーシャルスキル尺度・ENDE2 との相関係数

	ソーシャルスキル	ENDE 2
表出スキル	.51**	.16**
非表出スキル	-.05	.03

Table4 関係性別スキル行使得点平均・標準偏差

	表出スキル			非表出スキル		
親密性	n	M	SD	n	M	SD
高	549	18.26	2.93	549	20.35	3.53
中	549	14.93	2.99	549	22.47	3.56
低	549	11.72	3.31	549	22.68	4.19

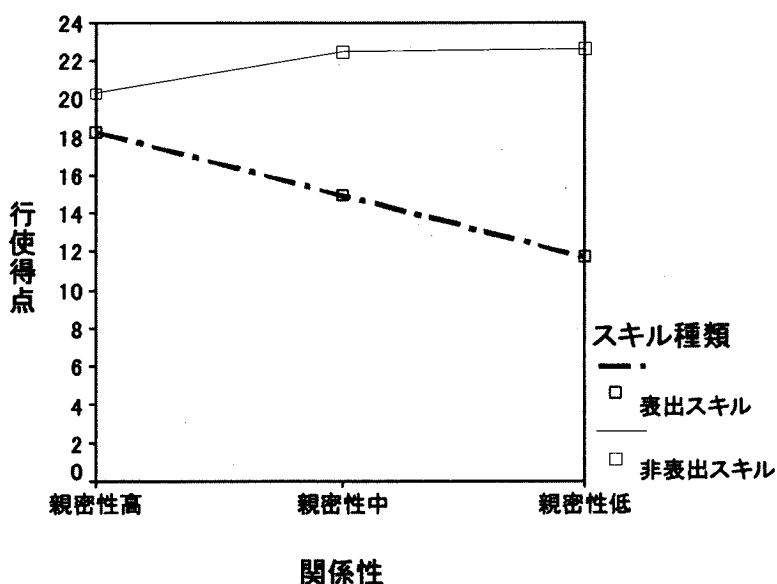


Figure3 関係性に応じたスキルの使い分け

4. 考察

本研究の目的は実際の生活によりリアルに根ざした社会的スキルと、その効果的な行使を司ると予想される「メタ・ソーシャルスキル」についての測定尺度を作成・検討することであった。まずそれぞれの尺度について考察した上で全体について述べていく。

4-1. メタ認知尺度

信頼性は $\alpha = .72$ で確保できたもののやや低く、項目の改良が要される。また因子分析の結果

から1因子解を採用したが、尺度作成当初設定していた「メタ・ソーシャルスキル」は対人関係状況での処理段階とデータベースとに分かれていた。一次元尺度が果たして妥当なのか、今後の調査で吟味していくことが課題として残されている。

今後は社会的適応との関連についても検討する必要がある。メタ認知尺度得点が高ければ高いほど、つまり対人場面で自らの置かれている状況・自分の行うことの出来るコミュニケーションスタイルについて高く理解していればいるほど、主体の精神的健康・相手からの評価共に高くなることが考えられる。

4-2. 社会的スキル行使尺度

まず予備調査によって、従来ネガティブとされてきたコミュニケーションスタイルに対しても日常事態においては適切な振る舞い=スキルとして認知され、また実際にも使用されていることが示唆された。社会的スキルを現実の生活により即した形で捉え直し、その効果や役割を測定する必要性が認められたといえよう。

信頼性は $\alpha=.76-.75$ とどちらのスキル因子においてもやや低かった。また、非表出スキルに当初表出スキルに分類されると考えていた「何か失敗したときに反省してすぐ素直に謝る」の項目が含まれている。これは非表出スキルにあたる「相手の気に入らないことを言って、怒らせそうになったときにすかさず相手の機嫌を取ってその話を流す」という項目があったためにそれと類似したものと捉えられ、「反省して」「素直に」といった表現がうまく伝わらなかったためではないか。今後項目間のバランスなどを改善し、さらに日常場面に即した社会的スキルを探っていかなければならない。

基準連関妥当性については、非表出スキルは従来の社会的スキルのどちらとも相関が見られなかった。これは、今回非表出スキルとして取り上げたものが従来社会的スキルとして扱われてこなかったことの現れであろう。つまり必ずしも妥当性を持たないということではないが、今後妥当性の検討については慎重になる必要がある。この尺度についてもメタ認知同様社会的適応との関連を明らかにしていかなければならない。おそらく表出・非表出スキルをどちらもバランスよく多様に行使することができる個人ほど、社会的適応に結びつくと考えられる。

この尺度では、同一のスキルに対して関係性別で行使頻度を問うという質問形式を採用した。関係性毎の使い分けについて、親密性の違いによる得点の差が認められた。全般的な傾向として親密性の高い相手には表出スキルを、中・低度の相手には非表出スキルを多く使用するなどの傾向がうかがえる。この回答形式は相手によるスキルの可変性だけではなく、一貫性についても同時に測定することが可能なため、意義あるものだといえる。個人内での使い分けの度合いを指標にし、適応との関係を検討するなど活用の可能性が期待できる。

4-3. 全体考察

本研究で作成した社会的スキル及び「メタ・ソーシャルスキル」の測定尺度は、ネガティブコミュニケーションをスキルとした点、関係性別の回答を求める形式を採用した点、スキルや対人関係状況へのメタ認知を測定対象とした点でそれぞれ独自性を持つといえる。ネガティブコミュニケーションについては、社会的スキルの従来研究では不適応と片付けられ、そもそも研究の対

象になることが殆どなかった。今回の結果から一見望ましくないと考えられるようなコミュニケーションスタイルについてもスキルになり得ることが示唆され、測定尺度の項目に加えられたことは社会的スキル概念に新しい一面を加えることになるであろう。

またこれまでの社会的スキルに関する研究やその測定では、相手との関係性に関わらず単純に高頻度にスキルを行使することがすなわち社会的スキルや社会的適応の高さを表すという前提があった。しかし例えば対人認知の分野では、我々が「動機を持つ戦術家 (motivated tactician) (Fiske & Taylor, 1991)」であり、相手との力関係や状況によっていくつかの対人認知方略を巧みに切り替え、自らの統制感や自尊感情を維持することが示唆されている。また言語学ではポライトネス (Brown, Levinson, 1987 など) という観点から、相手との社会的距離によってあてはまる言語的方略の種類が異なることが広く示されている。社会的スキルについても我々が相手や状況によって行使の度合いを適宜調節していることは容易に推測できる。本尺度で関係性別回答方式を採用したことで、その使い分けの実態や適応との関連について考究していくことができるのではないかと。

さらにこれらのネガティブコミュニケーション由来のスキル・関係性に応じた使い分けが適応的に実行されるには本尺度で取り上げたメタ認知能力が不可欠だと考えられる。

今回はそれぞれの尺度を別々に検討したが今後はメタ認知と社会的スキル行使とを組み合わせで測定し、その適応への影響について検討する必要がある。

「メタ・ソーシャルスキル」の定義に照らしてみると、社会的スキル行使及び関係性に応じた使い分けは、メタ認知を高く働かせて初めて適応的に機能すると予測できる。また男女によってコミュニケーションスタイルやその適切性は変化すると考えられるので、性差についても今後検討する。作成された尺度を基に、「メタ・ソーシャルスキル」の社会的適応に対する役割についてさらに考究していく。

引用文献

- 相川 充(1999) 孤独感の低減に及ぼす社会的スキル訓練の効果に関する実験的検討 *社会心理学研究* 14 95-105
- 相川 充(2000) 人づきあいの技術 社会的スキルの心理学 セレクション社会心理学-20 サイエンス社
- 相川 充・佐藤正二・佐藤容子・高山巖 (1993) 社会的スキルという概念について—社会的スキルの生起過程モデルの提唱— *宮崎大学教育学部紀要 社会科学* 74 1-16
- Brown, P. & Levinson, S. C. (1978) *Politeness : some universals in language usage*. Cambridge University Press.
- Crick, N. R. & Dodge, K. A. (1994) A Review and Reformulation of Social Information-Processing Mechanisms in Children's Social Adjustment. *Psychological Bulletin*, 115 74-101
- Dodge, K. A. (1986) "A social Information processing Model of Social Competence in Children In M. Perlmutter (Ed.), *Minnesota symposium in child psychology* (pp. 77-125). Hillsdale, NJ: Lawrence Erlbaum.
- 大坊郁夫・栗林克匡・中野 星 (2000) 社会的スキル実習の試み *北海道心理学研究* 23 22
- Fisk, S. T., & Taylor, S. E. (1991) *Social Cognition*. 2nd ed. New York: McGraw-Hill.
- 藤枝静暁・相川 充(2001) 小学校における学級単位の社会的スキル訓練の効果に関する実験的検討 *教育心理学研究* 49 371-381

- 後藤 学・宮城速水・大坊郁夫（2004）社会的スキル・トレーニングの効果性に関する検討—得点変化のパターンにみる参加者クラスターリングの試み— 電子情報通信学会技術研究報告 104 7-12
- 堀毛一也（1991）社会的スキルとしての思いやり 菊池章夫（編）現代のエスプリ 291 思いやりの心理 至文堂 pp150-160
- 堀毛一也（1994）恋愛関係の発展・崩壊と社会的スキル 実験社会心理学研究 34 116-128
- 石井佑可子（2006）社会的スキル研究の現況と課題—「メタ・ソーシャルスキル」概念の構築へ向けて— 京都大学大学院教育学研究科紀要 52 347～359
- 菊池章夫（1988）思いやりを科学する 向社会的行動の心理とスキル 川島書店
- 久木山健一（2002）社会的情報処理尺度の妥当性検討に関する試み 名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要 49 207-215
- Shahinfar,A.,Kupersmidt,J.B.,Matza,L.S.(2001) The Relation Between Exposure to Violence and Social Information Processing Among Incarcerated Adolescents. *Journal of Abnormal Psychology* 110 136-141
- Trower,P.(1995) *Adult social skills:State of the art and future directions*. In O'Donohue,W. & Krasner,L(Ed) *Handbook of psychological skills training: Clinical techniques and applications* (pp54-80)
- Trower,P.,Bryant.B.&Argyle,M.(1978) *The analysis of social behaviour*. In Trower,P.,Bryant.B.,Argyle,M.&Marzillier,M.(ed) *Social skills and mental health*. Methuen pp7-34
- 和田 実（1991）対人有能性に関する研究 —ノンバーバルスキル尺度およびソーシャルスキル尺度の作成— 実験社会心理学研究 31 49-59
- Whitehouse,R., Chamberlain,P.& O'brien,A(2001) Increasing social interactions for people with more severe learning disabilities who have difficulty developing personal relationships. *Journal of Learning Disabilities*, 5 209-220
- Zsolnai,A.& Jozsa.K(2003) Possibilities of criterion referenced social skills development. *Journal of early childhood research*, 1 181-196

¹ 相川らの「生成過程モデル」も社会的情報処理モデルと同様、社会的スキルの各過程とその背後にあり、各過程の影響を受けて変容する「社会的スキーマ」を設定しているが、一連の流れ全体を社会的スキルとしているなどの点で「メタ・ソーシャルスキル」概念とは異なる。尚、本研究での社会的スキルは表出されうる具体的行動に限定した。

（教育方法学講座 博士後期課程2回生）

（受稿2006年9月8日、改稿2006年11月28日、受理2006年12月7日）

Development of "Meta-social skill" Measurement

ISHII Yukako

I propose the general idea of "Meta-Social skill" as a concept to reinforce and sustain the impact of social skills on our social adaptation. "Meta-social skill" is the skill to metarecognize one's skills and the interpersonal situation, and to choose an appropriate skill. In this study, the purpose is constructing measurement of "Meta-Social skill". The measurement is divided into two scales to measure. One is a scale about the metarecognition of situations, and the other is a scale about a social skill. 423 students are participating for pre-investigation and 567 students for main survey. Reliability was confirmed with both scales. Between-item elaboration remains as a problem, but these measurements are useful. Especially, Negative communication styles can be the social skills by this scale. It can also measure social skill according to intimacy, and we can expect possibilities in the future.